

期腺癌の疑い例，治療目的として高度異形成および上皮内癌例である．現在までに，71例の円錐切除術を行い，経過観察38例，子宮摘出追加33例を経験した．創傷治癒は，術後約8週間を要し，間質組織の増成と頸管円柱上皮および扁平上皮の浸出が認められた．子宮温存例の3例が妊娠し，1例の満期分娩を経験している．

## 5) 胸部食道癌切除再建術における頸部吻合法の検討

若桑 隆二・和田 寛治  
田島 健三・松田由紀夫  
岡村 直孝・名村 理 (長岡赤十字病院)  
八木 伸夫 (外科)

胸部食道癌切除再建術における吻合操作は，全身的，局所的な特殊性から他の消化管吻合に比べ縫合不全の発生率は高いと考えられる．

我々は，過去2年間に40例の胸部食道癌切除再建術をおこない，その頸部吻合法につき検討したので報告する．

縫合不全は6例(15.0%)に認め，吻合部狭窄は2例(5.0%)に認めた．縫合不全の発生は再建臓器や再建経路では有意差を認めなかった．最近は器械吻合例が多いが，器械吻合21例中5例(23.5%)に縫合不全を認め，手縫い吻合(2列層々吻合)では1例(5.3%)であった．術後肺合併症と縫合不全の発生には有意差( $p < 0.01$ )を認め，術後管理の重要性が示唆された．確実な操作による吻合が望まれる．

## II. 特別講演

手術と創傷治癒，消化管吻合での研究方法

国立がんセンター外科部長

丸山 圭一 先生

## 第12回新潟高血圧談話会

日時 平成3年11月22日(金)

午後6時～

会場 新潟大学有壬記念館

2階大ホール

### I. 一般演題

#### 1) 郵政職員における冠動脈検診の結果

山本 明彦(新潟通信病院)

郵政職員において，血圧に影響を与えられる，年齢，Body Mass Index，食塩摂取量，アルコール摂取量，喫煙量の5因子について，血圧に対する影響度を検討した．さらに上越地方一農村と比較し，生活習慣の相違による血圧の差についても検討した．対象を平成元年度に今回の調査を希望した新潟市男性郵政職員359人と一農村男性住民300人とし，健康診断時に，生活習慣アンケート調査および栄養士による栄養聞き取り調査を施行した．新潟市男性郵政職員では，収縮期血圧はBody Mass Index，アルコール摂取量，年齢と相関し，食塩摂取量，喫煙量とは相関しなかった．拡張期血圧はBody Mass Indexと相関し，他とは相関しなかった．また農村男性住民の高血圧者の割合は36.4%と，新潟市男性郵政職員の18.4%に比し有意に高かったが，その原因として食塩摂取量の多いことが関与していると考えられた(農村住民平均15.2g，郵政職員平均10.8g)．

#### 2) 心電図，血圧などの二世代にわたる観察

江口 晃(NTT長野病院)  
新潟健康管理所

電々公社時代よりNTTにかけて在職した60組の同性の親子の心電図を比較した．親の平均年齢48.9歳，子の平均は40.5歳であった．RR間隔より求めた心拍数，PQ間隔，QT時間は親と子の間に有意の正の相関を認めたがQRS巾は有意の相関を認めなかった．

また47組の同性の親子(親の年齢の平均39歳，子の年齢の平均38.3歳)について血圧，身長，体重，心胸比を比較した所，収縮期血圧も拡張期血圧も親子の間に有意の正の相関が見られた．身長，体重についても血圧と同様正の相関があり遺伝の関与が明瞭であった．

子の身長，体重は親よりそれぞれ平均6cm，5kg大きく食生活，社会環境の影響が考えられた．また胸部X

線間接撮影により親子の心胸比を比較した所、親より子の方が有意に小さかった。これは身長、体重共に子の方が大型化し、それに伴って胸廓も大きくなったが心臓の大きさに変りがないことによると思われた。

## II. 特別講演

### 高血圧と突然死

#### 1) 破裂脳動脈瘤の疫学的側面 —上越地方の場合—

新潟労災病院脳神経外科

江塚 勇 先生

植村 五朗 先生

比較的画定された診療圏、くも膜下出血が脳外科の対象疾患であるという高い認識、58年まで唯一の公的脳外科施設であった。以上の三つの立地条件から上越地方のくも膜下出血のほとんどの症例は新潟労災病院脳神経外科で扱われたと考えられる。従って、当科で扱った症例のみでも本疾患の疫学的側面を述べることは可能と考え、CTが導入された昭和53年から60年12月までの8年間の症例についてまとめた。その結果

1) 診療圏内の症例は430例で、発病率は人口10万につき16.3/年以上となり、全世界で最高率であった。男の発病率は16.9以上、女15.8以上で男に多い。

2) 市町村別の発病率を検討すると、概して山間部に高く、海岸部では低い傾向があった。特に大島村、板倉町からの患者は多く、平均的な上越市に比べ統計的有意差をもって発病率の高い地域といえる。

3) 発生部位は、前大脳動脈瘤が最も多く、42.1%、次いで中大脳動脈瘤30.8%、内頸動脈瘤24.1%、椎骨脳底動脈瘤3.9%、そして多発脳動脈瘤は17.5%であった。

4) 発生部位を男女別にみると、男では前大脳動脈瘤(ほとんどが前交通動脈瘤)が多く(女の約2倍)、女では内頸動脈瘤が多い(男の約3倍)。中大脳動脈瘤は性差なく、多発脳動脈瘤は若干女に多い傾向があった。これも従来報告に見るとおりである。

5) 男の発病率のピークは50代で同世代の人口10万人に対し年間47.4人が発病、女は60代がピークで42.6であった。40代では男の、70歳以後では女の発病率が有意に高い。

6) 高血圧症の既往は52.1%にみられた。

7) 発病の多い月は2月であり、5日間に1例が搬入された。最も少ない月は8月で10日間に1例の割合であった。

8) 発病時間は、朝の6時帯と夕方の6時帯に特に発病することが多く、昼の12時帯にも比較的多い。午後の3時帯は最も発病が少なかった。夜間の1時間当たりの発病数は昼間に比べれば極めて少ない。

9) 発病時の行動をみると、作業中が最も多く、18.5%、次いで排便・排尿時16.7%、睡眠中13.6%、団らん時10.3%などであった。農作業中、排便・排尿時、および睡眠中の発病者に高血圧症既往者が多かった。

10) 脳動脈瘤破裂には高血圧の関与が大きいと考えられた。

#### 2) 心臓突然死について

新潟大学第一内科

相沢 義房 先生

心臓突然死からの蘇生の成功における欧米の成績から、80%に重症心室頻拍が関与していることが判明し、この知見が除細動器の使用を含めた1次救命処置での蘇生率の向上とその後の治療方針の確立の指針になっている。

わが国でも年間3~4万人の心臓突然死があると言われるが、その実態は不明である。急性左心不全として扱われている突然死の多くに心室細動や心室頻拍の関与が最も考えられる。

現在当科を含めた限られた施設では、致死性頻拍の症例の蓄積と新しい治療法の開発が進展している。しかし、これらの施設で治療を受けている症例は、心臓突然死群またはその危険群の極く一部と考えられる。一過性の意識喪失例や実際に蘇生された心臓突然死では原因に致死性頻拍が疑われることから、不整脈専門医による検査、治療が必須である。